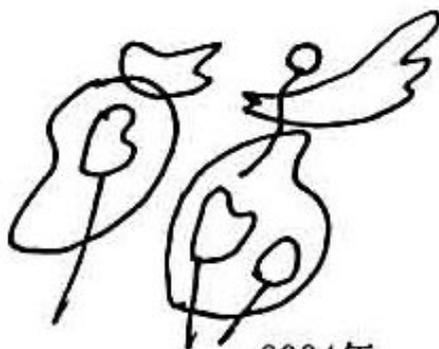


空



2004年

SORA 5号

晴夜 (5) | 3

柴田 佐知子

大寒や四角に張りし牛の貌

怒るには力が足らず寒満月

足袋白し奈落の底に立つときも

如月や寺領に立ちし青煙

決心のもとは恋なりたびら雪

海を出し海女のしばらく声持たず

片羽根と片脚伸ばし春の鳥

噴煙を見し夜のすさぶ桜鍋

連翹や山の向うの山は高く

山眠る

青山悠

管崎宮

蒼天に荒雄相搏つ玉競り

網元の土間の広さや飾り海老

淑気満つ四百年の大藁家

僧の影障子をよぎる初灯り

菓子折の上げ底に山眠りけり

手袋を暫く嵌めず祈りしあと



撥つくる冬の裸灯低く吊り

火と水に近き妻の座冬深む

相輪の空一穢なき寒の入り

仙厓の寺をでてきしかじけ猫

母と子の師系たがへて根深汁

陶片の片寄せてあり寒椿

宙をゆくキリンの首や日脚伸ぶ

ねんねこのずしりと故郷水迅し

夜がまだ明けきらない頃から、いつも犬の大きな鳴き声に悩まされていた。

犬にも甘えた鳴き方とか、威嚇する声があると思うが、ワン・ワン・ワンと妙に単調な鳴き方である。

ある日近所の方に「どうしてあの犬は昼も夜もあんなに鳴くのかしら」と話すと、「あれは老犬で目も耳も悪くなつて、知らない人の気配や雑音を警戒しているのよ」と言われた。人にも犬にも老いは避けられないものと思つた日から、犬の大きな鳴き声が気にならなくなった。最近は声が聞こえない日の方が却つて気になつている自分に思わず苦笑している。

紅 椿

秋
千
晴

林檎出す袖に舂殻ついてきし

団欒の林檎の皮の長々と

体ごと意地張つてをり鬼おこぜ

火事現場見知らぬ人と話する

冬苺宝石のごと詰められし

夜神楽の鬼を舞はせて笛細し



荒々と切り分けられし鱈場蟹

夜咄の箒目深く木洩れ月

雪女無視されること恐れをり

月も日も地球もまるしお元日

狸顔狐顔して餅を焼く

塀あゆむ猫に春日のあつまれり

苺ケーキ回転扉を出てきたる

拾はれて可愛がらるる紅椿

ずぶ濡れの恋猫のなほ鳴きつゝのる

夜咄に出掛けた。師走でありながらここだけは時間が止まっているようであった。この一年の無事を感謝し、来年の無事を願って本席に「無事」の掛軸がかけであった。

夕闇と共に加わる寒さ、寒さと共に更け行く夜を、短檠と手燭の灯で過ごすほの明るさは、他の茶事になく趣がある。また寒さ厳しき折の、中立も心身共に温まっているので新鮮である。満天の星に木洩れ月が箒目をより深くした。

夜咄の箒目深し木洩れ月

人と人との一体感だけでなく、自然との一体感をも得られた。まさに夜咄は茶事の醍醐味である。

冬帽子

あさなが捷

薯掘りの一団さりし土黒し

絵屏風の樹下に文人集まりぬ

ハロウインの子らにぎやかにドア叩く

魔かさは便利な言葉室の花

思春期の子と対峙せり初氷

客宴めひとりづつ去り冬銀河



カウはビーグルの雑種です。平成五年三月一日、忘れ雪の日に、六年生だった長女が拾って来ました。「元の場所に民してきて」と何度も懇願したのですが、降りきしる雪と可愛い目に負けてしまい、わが家の一員になりました。でもすぐに皆後悔することになります。

声がとてつもなく大きいのです。猟犬の血と、誰も嫉をしなかつた為に、郵便配達の人、セールスマン、宗教の布教の人などに、とにかくやみくもに吠え、特に夜中、ゴミ収集車のエンジンが遠くから聞こえ始めてから通り過ぎるまで吠えつづけるのです。

煤逃げを許さぬ母の立ちほだかる

襖絵やのたうちまはる松の枝

白装束にて寒鯛を捌きけり

日脚伸ぶ棟上げに子があつまつて

否といふとき唇の冷たかり

棺に入るるを忘れたる冬帽子

旧姓を花のたもとで呼ばれけり

両脚を見せて大地に虹おりる

去年の、夏ととうとう近所の方が不眠でノイローゼ状態になられ、やむなく母に預かってもらうことになりました。

今は広い庭の奥で、隣家の大きな犬に少し遠慮しつつも、おだやかに暮らしています。会いにいつて大喜びのカウに飛びかかれては、「教育されていない犬だ、飼い主の顔が見たい。」と文句を言います。

すぐにでも保健所のしつけ方教室に勉強に行つて引き取るつもりだったのが、つい甘えてしまい、問い合せもしないままです。そのくせ新聞の投書欄などに「ペットはきちんと躾をして飼いましゅう、動物を好きなひとばかりではありません。」などじとあると、「うちはペットも番人もいらなかつたのに、ただ命を守りたかつただけなのに」と、つい云いたくなるのですが、長年の気がねから解放され、私も眠れるようになりました。「カウ、お姑様、ゴメンナサイ。」

奏者席

荒井千佐代

かりがねや潮に一枚岩透けて

灘烈風ひらき初めたる尾花にも

人通す一間ととのふ冬日和

鮫鯨鍋ピアノ曇つてしまひけり

冬木の芽登園順に検温す

みどりごを秤に載する石路の昼



暮れ方の船笛長き雪催ひ

聖樹の灯海にちらして隠れ村

奏者席冷ゆ磔の主の高さ

路地奥の朽ち舟・リヤカー・蕪畑

冬菊や磯墓に波尖りくる

父の家に姉ひとり住む寒の入

熊笹に押鮎つつむ細雪

定位置にシリウス黙示録を閉づ

寒明けや深き轍が汀まで

「新聞社をこの夏定年退職し、俳句を始めました。『座の文芸』と頭の中ではわかっていましたが、こんなに楽しいものとは思ってもみませんでした。」

新聞社の賞を受けて以来、お世話になっている記者の方からの賀状です。人の俳句を読む立場でいらした方が、作るようになられ、更に句会が想像以上に楽しいとおっしゃる、その文面に（なかなか理解され難い俳句ですので）俳句も私自身も肯定されたようで嬉しく「句会で御一緒したいですね」と、返信を差し上げてしまいました。

俳句を続けることのしんどさが、身に沁みます。いい俳句を詠むことの方に、心を砕いてゆけたらと切に思うこの頃です。



空作品Ⅱ 柴田佐知子選

初神楽出を待つ鬼めすこし酔ひ 橋本五月

川霧の重しと言へり渡舟守

若水を陸で汲み来し舁妻

突つ張りし脚より白鳥着水す

この路地で死ぬ顔ばかり日向ぼこ

厄落し恋まで落としてしまひけり

二月礼者赤子を抱いて来たりけり